

# 向き合う



患医ねっと代表 鈴木 信行さん ①

私は、二分脊椎という主に歩行障害や下肢の感覚が弱くなる疾患をもち生まれた身体障がい者だ。さらに、20歳で精巣がんが発症、3年前の46歳には甲状腺がんの診断を受けた。

常に患者という立場で医療にかかわって感じるのは、患者と医療者が対等に対話する必要性である。そこで、対等性をどのように獲得し、そのために必要となる意識や行動変容について述べていきたい。

さて、まずは医療の目的を再確認したい。医師法、歯科医師

法、薬剤師法の第1条は「国民の健康な生活を確保するものとする」と締められている。

ここでいう「健康な生活」は、国民一人ひとりで異なるものを指す。私にとっては、おいしい食事の摂取が「健康な生活」である。医療者は患者にとつての健康な生活を的確に把握する必要がある。

しかし、私はこれまでの患者としての経験の中で、医療者から私の健康な生活観を聞かれたことはないし、把握しようという言動は極端に少ない。

よく医療者と患者は、情報の非対称性があるといわれるが、医療者をもつ情報は医学的知識である一方で、患者が持つ自身の健康な生活観に関する情報の双方が情報を出し合うことで、本来の医療がスタートすると私は考える。情報は非対称性なのではなく、患者がもっと情報を提供する必要がある。

そこで、私は、主治医に対し

## 「健康な生活とは」考えよう

て「要望書」という形で自分の健康な生活観や医療に対する希望、考えなどを複数回にわたって伝えた。その結果、医療者側としては治療方針が立てやすくなり、より患者の意向に沿った医療の提供が可能となった。

健康な生活観といっても一般の方々にはわかりにくい。そこで、人生で大切にしていることは何か、キーマンは誰かなど、健康な生活観を捉えられる質問を医療者がすることで、ある程度は見えるのではないだろうか。考える機会があれば意思を表明できる人は少なからずいる。その環境が整つことで、ようやく理想の医療環境のスタートが切れると私は考える。

**すずき・のぶゆき** 1969年生まれ。先天性の二分脊椎症で、20歳で精巣がんを患い、再発・転移後、46歳で甲状腺がんになる。工学院大卒業後、製薬会社の研究所を経て2011年に患医ねっとを設立して現職。